

2007-2008 ラグビーにおける試験的实施ルール(ELV)

導入における試合データの変化とラグビーの方向性

コーチング科学研究領域

5008A049-5 藤森 啓介

研究指導教員 : 堀野 博幸 准教授

．緒言

ラグビーでは、4年に1度行われるワールドカップ後に大幅な競技規則変更を行う傾向がある。2007年ワールドカップ後の2008年8月、INTERNATIONAL RUGBY BOARD(以下IRBと略記)が、全世界すべてのレベルの試合において、試験的競技規則(以下ELVs)を導入することを決めた。

近年のスポーツ現場で、相手のパターン、傾向などを知る上でゲーム分析の重要性が非常に高まっている。戦術に影響を及ぼす競技規則に着目し、ゲームを分析することはラグビーの指導において大変重要な課題であると考えられる。

そこで本研究では、日本の代表的トーナメント大会である大学選手権、Microsoft Cup、日本選手権の3トーナメントを対象に、2008年に導入されたELVs導入前後のゲーム様相の変化を明らかにし、ラグビーの指導について提言することを目的とした。

．研究の枠組み

1. 研究枠組み

競技規則の変更点に着目し、以下に示す5項目の研究枠組みを設定した。

- (1)キックに関わるプレーの変化
- (2)インプレー時間の変化
- (3)ラインアウト及びラインアウトモール

の変化

- (4)オフサイドライン及びタックルラインの変化

- (5)得点方法の変化

2. 分析対象

大学選手権、日本選手権、Microsoft Cupにおいて、2007年度全25試合、2008年度全26試合を分析対象とした。

3. 分析項目及び分析装置

得点について13項目、競技時間について1項目、コンテストについて16項目、キックについて11項目、カウンターについて5項目、その他8項目をラグビー分析熟練者3名で収集した。

映像の分析及び分析項目の集計は、映像分析ソフト PowerAnalysis Eizo Jockey を用いた。

4. 解析方法

対戦相手、出場チームが異なることから、インプレー時間の検定は、対応のないt検定を用いた。比率の差の検定は、独立2標本比率の近似法、 X^2 検定を用いて行なった。年度間の平均値の差の検定は、マンホイットニーのUテスト(直接法)を用いて行なった。いずれも有意水準5%未満とした。

尚、Microsoft Cup は標本数が少ないことから、大学選手権、日本選手権に加えて 3 大会合計として扱った。

．結果・考察

3 大会合計において、1 試合におけるキック数が有意に増加し、1 試合平均ハイパント数が有意に増加した。また、カウンターアタック場面においては、積極的なランプレーで突破する割合が減少し、蹴られたボールをキックで蹴り返しエリアを獲得するゲーム様相に変化したことが示唆された。

インプレー時間はすべてのレベルで減少した。ペナルティーゴール、セット数の増加がインプレー時間に影響を与えたことが要因として挙げられる。

1 試合平均ラインアウト数は、大学選手権で有意に減少し、日本選手権、3 大会合計でも減少した。また、ラインアウト失敗率がすべてのレベルで増加した。さらに、すべてのレベルで 1 試合平均ラインアウトモール数、ラインアウトモール率も有意に減少した。以上のことから、ラインアウトモールの得点源の可能性が低下したと推察された。

スクラムからの攻撃率は、すべてのレベルで減少した。ゲインライン突破率は、すべてのレベルで増加し、大学選手権、3 大会合計では有意に増加した。新タックルライン突破率もすべてのレベルで増加し、3 大会合計では有意に増加した。ゲインライン突破率、新タックルライン突破率は増加しているにも関わらず、スクラムからの攻撃率の低下は、攻撃側が 5m のアドバンテージを活かしきれていないと推察された。

すべてのレベルでトライ比率が有意に減少し、ペナルティーゴール比率が有意に増加した。このことより、得点パターンの変化が

見られたと考えられる。

表1 得点比率の変化

	2008	2007	有意差
スコアにおけるトライ比率(%)	67.9	75.7	*
スコアにおけるゴール比率(%)	19.5	18.3	
スコアにおけるペナルティーゴール比率(%)	12.2	5.6	*
スコアにおけるドロップゴール比率(%)	0.4	0.5	

* $p<0.05$

表2 スクラムからのゲインライン突破率及び新タックルライン突破率

項目	3大会合計		有意差
	2008	2007	
スクラムからの攻撃率	56.5%	66.2%	*
ゲインライン突破率	55.1%	44.4%	*
新タックルライン突破率	41.1%	32.3%	*
一次攻撃でキック選択率	21.7%	14.6%	*

* $p<0.05$

．結論

トライによる得点比率が減少し、ペナルティーゴールでの得点比率が増加したことは、ラグビーにおけるトライとコンタクトプレーが減り、ELVs の趣旨である観客やプレーヤーにとっての楽しみが少なくなったと考えられる。また、ラグビー憲章に示されたボールの争奪によるラグビーのアイデンティティーという観点から考えると、1 次攻撃ではキックが増え、カウンターアタックにおいてもキックが増えたことは、ボールが空中にある時間が長く競技のアイデンティティーを汲んでいないと考えられる。スクラムからの 1 次攻撃チャンネルは 0 チャンネルと 5 チャンネルが多く、競技規則変更前後で変化は見られなかった。このことは体格に優れているプレーヤーが有利で、あらゆる体型や体格の人のためのラグビーという ELVs の目的を汲んでいないと考えられる。

以上のことから、以下の 3 点が日本ラグビーの課題と考えられる。

- ・ スクラムからの攻撃戦術の改善
- ・ カウンターアタック戦術の改善
- ・ トライを取るための方策の改善